

「舞台」「エルマーランド」の 実践について

2011年度和光鶴川幼稚園・年長・星1組、2組 のプロジェクト活動

浜田真一 白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程

1 —— 本研究の目的と課題

本研究は、和光鶴川幼稚園における年長組の実践過程を追うことで、幼児教育実践現場におけるプロジェクト活動の展開について検討することを目的としている。プロジェクト活動は「『学習』『協働的学び』『探求型学習』などの教育活動の中心に位置づけられている活動」¹⁾とされている。幼児教育においては2005年の中教審答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の中で「小学校教育との連携・接続の強化・改善」という観点から「主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を「協同的な学び」として位置付け、その取組を推奨する必要がある」と提言される等、プロジェクト活動を重視する傾向がみられる。また、近年世界的な注目を集めるイタリアの小都市レッジョ・エミリア市における幼児教育実践は、日本の幼児教育におけるプロジェクト活動の隆盛にも少なからず影響を与えている。

しかし、プロジェクト活動が具体的にどのような形で実践されているかということは、各実践現場によってかなりの差異がある。教育実践におけるプロジェクト活動の原点はJ. Deweyの「オキュペーション」やW. H. Kilpatrickの「プロジェクト・メソッド」といった、米国における進歩主義教育運動に求められる²⁾。倉橋惣三の系統的保育案における誘導保育や、及川平治が始動した「生活単元」は、直接「プロジェクト」という名を用いていないが、進歩主義教育運動からの影響を受けており、プロジェクト活動的な要素も多分に含まれている。「プロジ

1) 田中智志・橋本美保『プロジェクト活動 知と生を結ぶ学び』東京大学出版会、2012年2月、i 頁。

2) 同上、1頁。

エクト」という名称が用いられているかどうかは別として、日本においてもプロジェクト活動に通じるものは多く実践されており、各々の実践は時代や場所といった背景によって目的とするものも性質も様々といえるだろう。従って、何ををもって、あるいはどのような要素を満たしていればその実践はプロジェクト活動といえるのかということを定義することは困難であり、各々の実践の背景を踏まえ、検討することがプロジェクト活動の質を高めるための議論にとって重要といえる。

和光幼稚園・和光鶴川幼稚園はコア・カリキュラム連盟の理論を出発点として、「単元活動」、あるいは「総合活動」といったプロジェクト型の活動を中心に位置づけた実践を行っている³⁾。穴戸健夫によると、1960年頃に、和光幼稚園部長となった久保田浩が、後に「基底となる生活」「中心になる活動」「領域別活動」の3層からなるカリキュラム案となる計画を考案・実践していた⁴⁾。久保田の後を受け継ぎ、部長となった小松福三は電車ごっこから発展した、みんなが乗れるような本格的な電車を作る「大型実用造形」活動を導入した。これがその後のカリキュラムの中に「乗れる電車を作って“電車ごっこ”をする」という「総合活動」として定着する端緒をつくった⁵⁾。

1969年、和光鶴川幼稚園が開設され、同年、小松が部長となった。「電車ごっこ」の実践は洗練され、定着していった。「電車ごっこ」ははじめ、積み木やなわを使って行われており、運転手、車掌、乗客の他に改札や切符売り場等の役割ができたり、踏切やトンネルが製作されたりする等、日を追うごとに本格的になっていた。しかし、「もう、つまんなくなつた」と意欲的な取り組みが見られない子どもが出てきた。小松が「どうしてつまんなくなつたの？」と尋ねると、「だって、本当に乗れる電車じゃないもん」という言葉が返ってきたという。そこで、小松は「子どもたちの“乗れる電車で作ってみたい”という要求（願い）をベースにして、実際に乗れる電車を作り、それで“電車ごっこ”をやってみようと考え」⁶⁾、子どもと小松は一緒に試行錯誤を重ねながら「乗れる電車」を作る実践を繰り返す。

この「乗れる電車を作って“電車ごっこ”をする」という実践は、その後和光鶴川幼稚園のカリキュラムに定着していくようになったということである。しかし、90年代に入り、幼稚園の子どもたちに変化が見られるようになったという。現和光鶴川幼稚園副園長である保志史子はその当時のことを「それまでやってき

3) 和光・和光鶴川幼稚園におけるプロジェクト活動の展開過程については、浅井幸子「和光幼稚園・和光鶴川幼稚園における総合活動の成立と展開」「幼年教育研究」に着目して』『東西南北2012』和光大学総合文化研究所、2012年。

4) 穴戸健夫『保育の森—子育ての歴史を訪ねて』あゆみ出版、1994年、127頁。

5) 同上、127-128頁。

6) 小松福三『体当たり幼児教育 和光鶴川幼稚園主事の実践』あすなろ出版、1977年、80頁。

ていた保育の中で、私たちがやりたいことと子どもとにずれを感じることが多くなって」⁷⁾ いたと回想している。子どもたちは「のりもの」等の伝統的なプロジェクトにのってこなくなった。保志によると、2000年に行われた「自然の中であそぼう」というテーマでの公開研究会における議論は「子どもと共感・共有するということの大切さ」について考え始める契機となり、2004年からは「子どもから出発する保育」、「子どもとつくる保育」ということが模索されるようになった。そこで、それまであらかじめ決められたテーマを取り組んできた総合活動をやめて、「その年の子どもの興味・関心にそったテーマを探りながら活動を進めていくプロジェクト活動に取り組むことに」⁸⁾ したということである。また、加藤繁美による「対話的保育」の提起を受け、「対話」を意識した実践を模索しているということである⁹⁾。そのような中で、4歳児の紙工作の実践、5歳児のお話づくりのプロジェクト活動が生まれている¹⁰⁾。

和光鶴川幼稚園は長年にわたって「電車ごっこ」をはじめとする「総合活動」という、プロジェクト活動に通じる実践を展開している。加えて、近年は子どもの育ちや学びに関する現代的課題に対して、従来の「総合活動」を問い直し、重要な取り組みの一つとして実践・研究している。和光鶴川幼稚園の「プロジェクト活動」を記録・検討することは、各々の実践現場において質の高い「プロジェクト活動」を展開するための議論に対する示唆を得られることが期待される。

2 — 研究の方法

本研究の対象は、2011年度に和光鶴川幼稚園の5歳児クラスである星1組（担任：室橋由美子教諭）、星2組（担任：進藤真帆教諭）で継続的に実践された総合活動（プロジェクト活動）である。2011年10月から2011年12月まで原則として週1回、和光鶴川幼稚園に通い、プロジェクト活動の展開過程についてビデオ撮影、メモによる記録を行った。本稿の参考資料として、上記の記録に加え、各クラス担任教諭からの聞き取りから得られた情報、同教諭が記録した、活動に関する話し合いの音声・映像記録、また各クラスにおける学級通信「風のとおしみち」（星1組）、「つーながろ」（星2組）から多くを参照した。なお、子どもの名前についてはすべてアルファベットで記述する。

7) 保志史子「和光鶴川幼稚園の保育が大切にしてきたこと」『和光大学現代人間学部紀要』第3号、和光大学現代人間学部紀要委員会、2010年、241頁。

8) 同上、241頁。

9) 保志史子「幼児期にみんなと一緒に学ぶことの意味は？—対話的保育への挑戦」『現代と保育 74号』、2009年、ひとなる書房。

10) 保志「和光鶴川幼稚園の保育が大切にしてきたこと」、前掲。

3——実践の展開過程と検討

3-1 星1組「舞台づくり」プロジェクト

星1組で展開したプロジェクト活動における一貫したテーマ、あるいは関心、探求の対象といえるのが、「舞台」である。このプロジェクトの発端は、人前で何かを表現することが好きという子どもたちの関心、要求にあった。星1組の子どもたちは、ダンス、コンサートごっこなど何かを演じるごっこ遊びが好きだった。また、チケットを作って年少や年中の子どもを招待したり、劇場に見立てて観客席を作ったりすることを楽しんでいたということである。室橋教諭は、教室に本格的な舞台を作って据え置きにすることを考え、会議で相談し、他の教諭の意見にも後押しされ、9月から本格的にその方向で始動しようと考えたということである。

星1組学級通信「風のとおりの道 No.48 (2011.9.15)」に9月13日午後の出来事として、舞台設置の様子が以下のように記されている。

13日の朝、Mくんが、だまし船の折紙を持って来ました。私が「すご～いなんで～？」とハデに驚いていると……「フフフ」と嬉しそうなMくん。「なんだかマジックショーみた～い」と声を掛けました。「マジックショーやってよー」なーんて会話をしていると、「いいよ～」とMくん。それを聞きつけ、「ゴムでもできる!」とKくん。「あやとりもできる!」とR3。「じゃあ、舞台つくるからそこでやってみせてよ!」と言うと「いいよ～」と3人。

そこで、午後さっそく舞台をつくったのでした。ホールから大型積み木を運び、カーテンのように幕をつけられるようにしたいと机のところにたる木をガムテープと針金でつけました。(中略)

そして、たる木をMyインパクトドライバーで取り付け、カーテン用布をかけました。カーテンの長さを合わせて……と。イスも客席として並べました。

(中略) いよいよはじまりはじまり～。「最初はお笑いで～す。」と司会のMくん。なんだか今流行りの芸人さんのモノマネ。あまりおもしろくない……(汗)

このあと、花組を呼んできた子どもたち。全く舞台の中身は相談していなかったもので、ちょっとこちらで、声を出し司会として場をまとめる係をしてあげると、「マジックショーで～す! タネもしかけもありませ～ん!」と始まりました。「よ～く見ていて下さい!」とYくん。無言のまま続けるMくん。司会・進行役のRくん、R2くんも見守ってくれています。室橋「今からこのゴムが違うところの指に移動します! だって! よく見てね!!」

(後略)

教諭が「9月から本格的に据え置きの舞台を設置する方向で始動しよう」と考えていたときに、だまし船の折紙を持ってきたMくん。教諭が「すごい！」と驚くと「フフフ」と嬉しそうにする、というやりとりを交わしている。恐らく自分が持ってきただまし船が先生を驚かすことに成功して誇らしい気持ちだったのだろう。Mくんは、「マジックショーやってよ～」という提案に「いいよ～」と快く応じている。それに便乗する形で、「ゴムでもできる!」、「あやとりでもできる!」とどんどんやってくる子どもたち。「舞台つくるからそこでやってみせてよ!」という先生の提案は、それまでもにも頻繁に人の前で何か演じるということを楽しんでいたということもあったのだろう、「いいよ～」と自然に受け入れられている。

とんとん拍子に話は進み、その日のうちに教室の一角に舞台が設置され、開演する。「(だまし船等の) 芸を見せたい」という子どもの思いが、教諭の「舞台を作るというプロジェクトができないか」という見通し、願いに触れ、形になったといえる。またその際、やろうと思いついたら簡易であるがすぐに舞台を作り始めることができる、木工の材料や技術等の園環境・文化も大きく貢献している。

次の日(9月14日)から、教室に設置された舞台で様々な活動が展開されている。

星1組学級通信「風のとおる道No.53(2011.9.21)」には9月14日の出来事として、次のような記述がある。

午前中、朝から舞台の上では、荒馬を付けた荒馬座(?)かと思われるY2馬が。太鼓はRくん、R2くん、Mくんと次から次へ。しまいには、パーラックを持ったRくんがトーシンドローを踊って見せてくれたのでした。

そして、帰りの会で、私が幕を開けて舞台上でよみきかせをすると……なんと、M2ちゃんが続けてよみきかせをしてくれました。えほん「ちのはなし」を読んでもくれました。こういう舞台の使い方もいいなあと改めて思ったのでした。舞台の上で演じる中味って多種多様ですね。子どもたちにちょっときっかけを与えてあげるだけで、どんどん自分たちで見せたいもの、やりたいことを考えだします。Rちゃんはチアのポンポンを持って来てくれてやって見せてくれました。これもステキ～!!

舞台が設置されていることで、その空間に惹きつけられるように、子どもたちからどんどん何かやりたいという要求が生まれてくるようである。それから、紙芝居や獅子舞等、



写真01 教室に設置された舞台

多様な活動が舞台を活用して展開されている。9月20日の学級通信には、子どもたちによって舞台の上で紙芝居が演じられる様子の記録がある。そこでは、Mくんが「ぼくおさえてるひと」と、紙芝居舞台を手で支える様子等が記されている。

9月29日、山梨大学幼児教育講座教授の加藤繁美氏を招き、園内で年長組のプロジェクト活動に関する会議が開催された。室橋教諭から星1組のそれまでの活動の経緯が報告された。また、今後舞台上で何を見せていけるか、それにあたってそれぞれの出し物の専門家の力を借りるべきかということが議論に挙げられた。ここで加藤氏から、「本格的な舞台作りをすることそのものが一つのプロジェクトになるのではないか」という提案がなされている。そしてその際、重要になるのは「裏方の人間」であるという。すなわち「みんながバラバラにやっていること」を、「共通にイメージできるものはなんなのか」ということを大事にしていくのが面白いのではないかとということである。そして、加藤氏はその際、「われわれのイメージ、室橋教諭のイメージを超える舞台」を作ることが大事になってくるといふ。つまり、「保育者が考えるレベルでつくらせると、結果的に保育者のイメージを子どもにやらせたことに」なってしまうということである。

10月以降、運動会の練習との兼ね合いもある中、星1組のプロジェクトは本格的に、「舞台をつくる」という方向で始動していくことになる。上述した9月の会議でも出た意見であったが、子どもの、舞台に対するイメージを広げるというねらいもあり、本物の舞台の見学に繰り出す活動が展開される。

10月15日、16日の週末を利用して、生田緑地の民家園に展示されている「船越の舞台」へ見学に行く。教諭、子どもたちだけでなく、保護者も一緒に参加している。ここで子どもたちは、舞台の裏側や、奈落、花道、「雪を降らせる場所」等を見学し、ボランティアから舞台や、そこで公演される歌舞伎についての説明を受けた。後日（11月3日）、同じ場所で「義経千本桜 二段目 伏見稲荷鳥居前の場」の公演があり、子どもたちは花道等が実際にどのように活用されているのか、目にすることになる。10月25日には同様に、昭和音楽大学の大ホール見学に出かける。こちらはオペラ等が上演される舞台で、船越の舞台とは趣向も異なる。昭和音大の職員の説明を受け、実際に照明や、幕が上がるところなどの舞台装置を見せてもらった。

これらの舞台見学は、子どもたちの舞台のイメージに強いインスピレーションを与えたことが予想される。今後、どのような舞台を作るかという子どもたち同士の話し合いのテーマや、実際につくられた舞台には、ここで見学した舞台装置がかなり反映されている。



写真02 船越の舞台 歌舞伎見学

運動会を終え、プロジェクトは舞台の本格的な製作へと移行する。舞台の製作は、随時、どのような舞台にしたいかということに関する、子どもたちと教諭との話し合いを経て進行している。

まず、舞台をどこにつくるかという問題について、話し合いが行われている。室橋教諭によると、教室に設置されていた舞台に破損箇所が見られ、また「教室の舞台は狭い」という意見が出てきたため、教室より広い場所に舞台をつくるのがいいということになった。そこで、ホール、体育室、運動場、雑木林等の場所の提案が子どもたちから出てきたが、「外は雨だと傘を持たないとお客さんが濡れちゃう」等といった意見もあり、室内のほうがいいということに。最終的に、ホールの一部分につくるということが決定した。

教諭が「ちょうどいい板見つけたんだ」とコンパネ（板）を持って来て、それを用いて舞台をつくってみることに。子どもたちは先生に教えてもらいながら、墨だしや釘打ち等の作業を行った。個人差はあるものの、子どもたちの金槌扱いは達者であり、普段から木工に親しんでいることが窺える。数日の作業を経て、積み木の足の上に、補強したコンパネが3枚乗せられ、舞台の基本的な形が完成した。完成した日は、みんなで舞台の上や周辺でお弁当を食べたということである。それ以降、舞台の上や周りで走り回ったりして遊ぶ星1組の子どもの姿がしばしば見られた。

その後「舞台ができると自然に、階段を付けたくなった」ということで、大型積み木で階段が取り付けられる。そして、形が整ってきた舞台に触発されるように、今後、舞台には何が必要かという話し合いがもたれている。話し合いの様子が、星1組学級通信「風のとおる道 No.79 (2011.11.14)」に記されている。

R：ひもをつけてひっぱるまく　じしゃくをつけておく

Y2：かくれるばしょがいる（ぶたいのそでまくのこと）

K：うえに2かいだてにしておいてかくれる

Kちゃんは、「舞台の後にもパネルが必要」と言って「持って来て！」とお願いされたので、持って来ると、「そこに絵を描いて貼るのがいいよ」と言って歌舞伎を見た時のことを思い出していたのでした。その絵の後ろの〔という〕意〔味〕。

R2：ぶたいにあなをあけてそこにかくれる（すっぽん）

A：くろいおようふくをきてるひとがいればいいんじゃない？

T：「それ　くろこっていうんだよ」　そうそう！　と私〔教諭〕

H：かいだんをつくればいい。さかみちはどう？　ぶたいがまわるようにしたい

R2：（ぶたいの）よこにかいだんつけるのは？

R3：ならくにはしごをかける

M3：まるまるもりもりおどりたい

S：ならくにまく

K：はなみちもいる

子どもたちの中には照明や音響、座席、チケット等はまだ出てこないようです。今週の人形劇サークルの公演で暗幕や照明に触れる機会があるので、そこで「自分たちの舞台でも使いたい！」となるのでは？とこっそり期待しているところです。（でもそうならなかったりして……ハハハ。）（略）

そして……はなみちやまわり舞台もどういう時に必要なのか公演する中身によって必要か必要じゃないか話し合っていくのがいいのかなと思っています。こちらもどうなることやら……

これらの子どもたちの希望は、一部（幕や袖幕、舞台の後ろのパネル、花道等）は実現し、一部（奈落のはしご、回る装置等）は実現しなかった。話し合いは、子どもたちから矢継ぎ早に、どんな装置が欲しいとか、それをつくる為にどういう工夫が必要かといった意見が出てきていて、教諭は子どもたちの意見一つ一つを汲みとり、紹介しながら何を、どうやって実現できるかという話に導いていく。上記の学級通信にもあるが、子どもたちは船越の舞台や音大の舞台を見たことに少なからず触発されているようであり、また、つくろうと思ったら本当に自分たちの舞台をつくれるという状況の中で、希望を膨らませているようである。

これ以降、子どもたちの意見を基に、舞台の仕組みが次々とつくられていく。教諭も、大工に相談したり、子どもの「これが要る」という要望を受け、材料を用意したり、他の教諭に手伝ってもらったりしながら、舞台づくりに尽力している。のこぎりで木を切ったり、釘を打ったりするのは専ら子どもたちの仕事である。ホールや廊下で、真剣な表情で木工作業をしていた。木工そのものの楽しさもあるのだろうが、自分の作業がみんなの舞台の一部となるということを、実感しているようでもあった。

11月22日、保護者たちによる人形劇サークルの公演が、幼稚園で開催された。星1組の子どもたちは公演後、人形劇舞台の裏側や、スポットライトの装置を見学させてもらう。サークルの方がスポットライトの操作を教えてくれるのだが、本格的なスポットライト装置に子どもたちは興味津津で、実際操作させてもらうのに、子どもの行列ができ、何回も繰り返し並ぶ子もいた。その装置は、星1組の舞台で使わせてもらえることに。照明係の



写真03 みんなで釘打ち

仕事ができた。

舞台製作と同時に、舞台で何をお客さんに見せるかということの話し合いも持たれる。11月17日、協同的学びに関する合同研究会が幼小で行われ、小学校の教諭たちが見学をしながらの話し合いでは、教諭の「舞台で何を見せたい？」という問いに、なんだきとちゅんじゅん（エイサー）、まるまるもりもり（歌と振り付け）、劇「おたまじゃくしの101ちゃん」、マジックショー、お笑い、プリティリズム（チアリーディング）、紙芝居、なぞなぞという意見があがった。話し合いの様子の一部が、星1組学級通信「風のとおり道 No.80 (2011.11.21)」に次のように記されている。

今までやったことのなかった劇をやりたいと言い出す子どもたち。面食らう担任。

室橋：劇？ 劇って、星組がものすごくいっぱい時間をかけてあそびから、劇にしていくなだよ。すぐ簡単にはいかないんだよ？

A：あおさ、月組〔年中〕のときにやったのにすれば？

M：そうそう！それいい！おたまじゃくしの101ちゃん!!

子どもたち：やりたいやりたい！それにしよう！それならやったことある！

室橋：先生見たことないよ……

子どもたち：「先生に見せてあげるよ！」と大盛り上がり

子どもたちは、私の心配をよそにすっかりその気になってしまいました。さっそくその場で集まり出し、「誰が101ちゃんする？」「お母さんは誰？」「ざりがにの親分は？」「たがめやりたーい！」などなど大さわぎ。本当にやりたい思いがあふれている様子に、月組の再演かあ～！まあそれもいいかもしれない。子どもたちどんなふうにするのかな……と見てみたい気になり、「よし！じゃあおたまじゃくしの101ちゃんやろう！」という大喜びの子どもたちでした。目を白黒させる担任の様子に興味津津の鶴小の先生たちです……（汗）。

劇以外に子どもたちから出てきた演目の希望は、普段から各々で楽しんでいるものだったが、急にやったことのない、それも3学期に本格的に取り組むことになっている劇がやりたいという意見が出てきて、教諭も「面食らって」いる。舞台といえば劇というイメージがあったからなのか、年中の時に劇をしたのが強い記憶として残っているのかわからないが、一致団結して劇をやりたいと主張する子どもたちに、教諭も説得され「見てみたい気になり」、話が進む。改めて、「何かを人前で見せる」という子どもたちの関心が思い起こされる。そして、教諭が

「簡単にはいかない」と考えることでも、子どもと教諭のやりとりの中で実現していくという雰囲気の中に、このプロジェクトの柔軟性が見られる。

演目と、誰がどれに出演するのかということが決まってから、舞台の上で公演に向けた練習が行われる。これまで主に自分たちが楽しむためにやってきたことも、お客さんを招いて舞台上で公演するということになる、真剣味を帯びてくる。お笑いチームの演目が決まる過程が、星1組学級通信「風のとおる道 No.82 (2011.11.22)」に次のように述べられている。

それぞれ何を見せたいのか分かれた先週、私自身一番の謎であり（笑）、心配だったのが、お笑いチームでした。子どもたちが教室の舞台上、やっていたのは、ピラメキーンという番組で芸人さんがやっていたギャグのものまねでしたが、「花組〔年小〕や月組〔年中〕の子どもの中には、そのギャグを見たことのない子もいるし、よくわからない子もいると思うよ」ということ、そして何よりも、あんまりおもしろくない……というのが実情。そこで、お笑いをやりたい！と言った子どもたちには、「みんなが見て『おもしろい！』ってなったら舞台上でやれることにしよう」という話になっていました。

朝から、お笑いのチームを招集。「どうする？」と尋ねると恥ずかしくなったR2くんは「オレやっぱりやめる」とのこと。その穴を埋めるべく、Sくんが、「オレやる！」と参加し、R・S・Y2・Mの4人でお笑いチーム結成。しばらくまかせていると、何やら相談が始まり、どうやら、レストランのお客とウェイターという設定でお話が進む。

ボケ役のウェイターMくん。頼んでもいないドーナツをシルクハットから出すというネタ。（ちょっとおもしろい!! シルクハットはマジックの人用に用意したものだけど、マジックショーをやるのもMくんだし……まあいいか。）そのボケにつっこみながら派手にひっくり返るRくん、Y2くん、Sくん。そのひっくり返るかんじがとってもおもしろい!! 「これなら花組・月組にもわかるね!」となりみんな大喜び。

（中略）

この先どこまで深められるか。お笑いの世界って実はすごく奥深く難しい……でもみんなの笑顔を目指して……!!

年少、年中組の子どもたちに見せるためには、内輪で面白いだけでなく、多くの人が見て面白いと思えるものを考えなければならない。そういうものにできるのか、教諭は子ど



写真04 舞台上でエイサーの練習

もたちと打ち合わせをする。子どもたち同士の相談があり、実際にやってみる中で、みんなが面白いと思えるコトが生まれている。ネタが決まってから、公演に向けて舞台の上で繰り返し練習が行われた。ダンスや劇とは違い、コトの中のセリフ回しや動き等は、練習の度に微妙に異なる。何回も繰り返し練習する子どもたちに、それを見ている教諭が、「もっとこうしたほうが面白いんじゃない」、「誰々が先にこれを言ったらどう」等と、師匠と弟子のような関係で指導やアドバイスを行った。

舞台製作では、幕が完成し、スポットライトが設置され、客席もできた。お笑い以外の公演の練習も頻繁に行われ、着々と公演の準備が仕上がっていく。この間、どの順番で出し物を行うか、演目を行う一座の名前、劇を行う劇団名をどうするかといった話し合いも行われ、一座の名前は「ほし1ぶたい」に決定している。

12月に入ると、子どもたちは一座「ほし1ぶたい」として、公演の連続の日々であった。連日、隣のクラス、年少や年中クラスの子どもたち、他の教諭、職員、保護者、鶴川小学校の生徒等を招待し、公演が行われた。保護者による衣装の提供等といった協力もあり、公演は見栄えもよく本格的な雰囲気であった。司会進行や幕の開閉、照明、舞台装置の操作等も子どもたちが主になって行われる。幕の開閉などの「裏方」の子どもも、真剣に自分たちの役割をこなしていた。保護者を招いて活動を「伝える会」の前日、星1組学級通信「風のとおりの道 No.96 (2011.12.12)」には、来園する保護者に向けて、次のような記述がある。

また、子どもたちがどんなことをしているのか。裏方の子にも目を向けて見てあげて下さいね。舞台の上で演目を行っているその子の出来ではなく（とかくステージだとそういう視点になりがちですが、そうではなく）舞台づくりや、この舞台のどんなところが好きなのか、すごいのか、こういうふうにしようって考えたのは誰なのか？など、子どもたちから出て来ない時にはお母さんから聞いてあげて下さい。

誰が上手かということではなく、その子自身が頑張っていたところはどこなのかペアになって、伝える時間をつくります。舞台をつくった時のこと、幕づくりのこと、などもきいて下さいね。

子どもたちの伝えるものは、それぞれの演目だけでなく、全体としての「自分たちの舞台」であるということが強調されている。実際、子どもたちは司会から裏方まで、全員で



写真05 完成した舞台での公演

つくる「僕・わたしたちの舞台を見てほしい」という気持ちで公演を行っていたのではないだろうか。

12月16日、「ほし1ぶたい」は鶴川小学校の5年生を招いての公演で、「千秋楽」を迎える。その後舞台は、年明けの3学期に行われる劇活動も見据えて、とりあえずはホールに設置したまま残すことになった。

星1組学級通信「風のとおり道 No.97 (2011.12.19)」に、以下のように記されている。

この活動を通して

友だちの張り切る姿に刺激を受け、自分なりに何かしたいという力が育っているということ。

友だちと一緒に、このほし1ぶたいを創っているという意識が芽生えているということ。

仲間と共に、ひとつのことをつくり上げようとそれぞれが自分を出して話し合いつくなっていく集団としての力がついていることが感じられ、心から嬉しく思います。夢を描き、それを実現させていくこと、それは簡単なことではないし、1人では難しいけれど、仲間と一緒にであれば、できる！ という体験が少しでも子どもたちの中に残っていってほしいなあとと思っています。

3-2 星2組「エルマーランド」プロジェクト

星2組では、R.S.ガネット（渡辺茂男訳）『エルマーのぼうけん』やそれに続くシリーズの物語世界がプロジェクトにおいて子どもたちが共有する関心事であった。6月中旬から、担任の進藤教諭は「朝や帰りの集まりで、歌や発表、生活の話の他にも、子どもたちと楽しみをつくりたい」という思いで、『エルマーのぼうけん』の読み聞かせを始めた。子どもたちは『エルマーのぼうけん』の面白さ、作品の世界にどんどのめりこんでいった。進藤教諭によると、星2組の子どもたちは「おままごとやごっこの世界が好き」だと感じていた。教諭は「もしかしたらエルマーごっこもイケるかもしれない」と思い、最初に物語に出てくる登場人物等のお面をつくると、子どもたちは大盛り上がりで、チューインガムやペロペロキャンディ等、物語に登場する動物等による困難を凌ぐための道具を模したものをつくり始めた。その後、ホールで大型積み木を用いて、ぴょんぴょん小岩や、クランベリー港、船、竜の住む場所等をつくり、子どもたちでエルマーごっこを楽しんでいる。

星2組の子どもたちが好きなごっこ遊びを、その時期に夢中になっていた『エルマーのぼうけん』で「いけるかもしれない」と教諭が環境をつくると、子どもたちはどんどん乗ってきた。9月29日の園内会議による進藤教諭の報告資料では、普段友だちの遊びの輪になかなか馴染めなかった子どもが、お面をつけると「水

を得た魚のよう」に、楽しそうに演技をしたり、クラスの子どもたちは「おにごっこ、サッカー、ままごと、工作……それぞれ好きなあそびをして過ごしているが、エルマーごっこではみんなが盛り上がっていた」ということである。

その後も何日間かエルマーごっこは続き、エルマーごっこに関する様々な遊びが展開される。数人の子どもが中心となって物語に登場する小道具（虫眼鏡、チューインガム、歯ブラシ、リボン）が製作されたり、ある子は竜の羽を段ボールで作し、教諭がガムテープで輪を付けてあげると、子どもたちは交代で羽を身につけて遊んだりした。また、Mくんが「のれるりゅうにしようよ」と言ったことをきっかけに、積み木に段ボールを貼って、のりものにして遊んだり、その時には実際に取り組まれることはなかったが、Kくんが「エルマーの実写版つくりたい」と言い、数人の子どもがそれに乗ってくるといったように、各々の子どもの関心毎に、様々な要求や活動が展開されていた。

7月11日、教諭が「エルマーのぼうけんすごろく」という市販の双六を持ってきた。多くの子どもたちがそれで楽しそうに遊んだ。その中でK2くんが、「教室がすごろくになればいいのにー」と言った。教諭は上記の報告資料でその発言に対して「子どもがエルマーになって、冒険をすすめていく……というK2のアイディアはおもしろいと思った。すごろくをしているうちに、思いついたのだろう。チマチマ小さなすごろくのコマを進めているより、自分が進んだ方が面白いだろうな」と述べている。

その後、Oちゃんの「もっとおおきなりゅうで、うしろに机でくっつけられたい」という発言を受け、2日ばかりで大きなりゅうの絵を完成させたところで、終業式になった。教諭は「夏休みの間、子どもたちの間でエルマーはもう過去のものになっただろう、と思いつつも、大掃除ではこれまでの残骸は捨てられず、教室の隅においておいた」ということである。

教諭は「過去のものになっただろう」と思っていたエルマーだったが、2学期が始まり、隅に置いてあった段ボールのりゅうをM2がを見つけ、「りゅうのつづきは？ これ、まだ目もついてないじゃん！」と言い、Kも「ぴよんぴよんこいわ、つくろうよ！」と言った。教諭は報告資料でその時のことについて「おぼえていたのか」と思いつつ「おそらく、それぞれ思い描いていることは違うだろうが、エルマーごっこであそびたい気持ちは続いている」子どもたちがいた。そしてその子どもたちは1学期には教諭が「じっくり関わることができなかったメンバー」だったので、「この子たちの思いを一緒に実現できたらいいな」と述べている。

そしてエルマーの遊びは再開する。ぴよんぴよん小岩、船、麦袋、泣きべそボール等がつくられ、教室がエルマーの物語に出てくる海や島のように。しかし、6月から繰り返しやってきた「劇エルマーごっこ」は、「暗礁に乗り上げた」ということである。ある日の劇遊びの様子が、9月29日の園内会議で用いられた資料で次のように記されている。

昨日たまたま、星1に来た花組が帰りに星2にも寄ってくれたのだが……
帰りの会が始まる14時開催ということもあり、さらに頼みの綱？いつも全ての役をやってくれるK3が、ままごとに夢中で不在、ということもあり、何が何だかわからないこと

エルマーをやっていたEも、ふざけ始め……

收拾がつかなくなった。

そこへ、別のあそびをしていたIもやってきて、急にりゅうになり……

帰りの会のとき

M2「あのさー、今日のエルマー、めちゃくちゃでよくわかんなかった」

O「Eがぼうしかぶんないから、だれがエルマーかわかんなかったじゃん」

E「だって、動物出てくる順番もめちゃくちゃだったじゃん。Eやる気なくしたんだよ」

K「じゃあ、絵貼っというてよー進藤先生！先生も間違えてた」

黙っていると反省会のようになっている。あそびなのに……？

悩みどころである。劇のように、きちんとストーリーを成立させるのが目的ではない？

子どもたちは、お客さんに見せたいのか？

「壊れない、乗れるリュウをつくりたい」というのは共通の思いのようだが。

別々のことに興味がある子どもたちが『エルマーのぼうけん』を通じて、遊びを共有している。「エルマー」への関心の深さは、時には教諭の予想も越え、子どもたちの側からもどんどん活動が生まれてきている。これまでバラバラの遊びをしてきた子どもたちが一緒に取り組めれば、といったような教諭の思いもあり、6月から始まった「エルマー」の取り組みは、2学期を迎えても継続される。

その一方で、劇が「暗礁に乗り上げる」こともあったり、「エルマー」という共通の活動の中でも、まとまらないということもあった。『エルマーのぼうけん』をめぐる、子どもたちは各々の関心から、要求を述べ、教諭はその一つ一つを受け止めた結果、多種多様な活動が展開され、子どもたちはそれぞれを楽しんでいた。しかし、どのような「プロジェクト」にしようかということは、エルマーというテーマで推し進めていいのかという教諭の迷いもあり、中々決定的なものが見えてこなかった。9月29日の園内会議では、その辺りのことが議題に挙がっている。

園内会議で、加藤繁美氏は、単発に出てきた願いから始まる「小さな物語」をつなげて一つの「大きな物語」にすることについての難しさについて述べ、「こういうプロジェクトやろうって、割り切って生活するような、学びのスタイルをもう普通にしちゃうのもひとつの手」なのではとコメントしている。また加藤氏

は、演繹的に、一つの共通の目標に向けてディティールを埋めていくということについて、共通のイメージを持つためには、教諭と子どもの「ひらめき」が大切であるということが述べている。

この園内会議は星2組のプロジェクトにおける一つの転機であった。これまで丁寧に、個々の子どもたちの要求を汲み、自身からは子どもをプロジェクトに向けて先導していくということをそれほどはしていなかった教諭は、園内会議を受け、「エルマーのぼうけんすごろく」プロジェクトを積極的に進めていこうとしている。その辺りの教諭の思いが、11月の幼小合同研究会における報告資料に、以下のように記されている。

実は、7月にすでに「教室がすごろくになったらいいのに」という、K2の提案から、子どもたちは段ボールでエルマーを作ったり、みかんの木や、歯ブラシ、チューインガム・ジャックナイフなど様々なアイテムを作って、すでに子どもたちの中には“始まっていた”。(すごろく、というよりは劇ごっことしてずっと続いていた)

にもかかわらず、“今年の星2組のプロジェクトはこれに決定!”という一歩が担任としてどうしても踏み出せずにいた。

加藤〔繁美〕先生の「“これをやろう!”という共通の目標を持ち、“そこに行きつくためのディティールを細かく細かく埋めていく思考”を子どもたちに育てることが大事なのでは」という言葉に、背中を後押しされる気持ちだった。

和光鶴川幼稚園でプロジェクト型の活動(協同的学び)が始まって5年。「もうそろそろ、園の文化として定着してきている。子どもたちが星組になったら、“何のプロジェクトやろうか?”“これプロジェクトになるんじゃない?”と言える……そんな5歳児に。教師側も覚悟をしてもいいんじゃないか?」「クラスの中に既に起きているショートストーリーをいくつもいくつも重ねていても、それはつながっていかない」ということだった。対話的に……というところにこだわりすぎていては、その先が見えてこない。“自然発生的に”としながら、なかなか覚悟が決められずにいる自分に気付かされた。

園内会議では他の教諭からも、子どもたちの中にもう、星組になったら大きな活動をみんなでやるものだという認識があって、いわばいつそれをやるのか待っているような状態ではないのかということなど、「大きな共通の目標」に向かうプロジェクトを後押しするような意見も挙がっていた。翌日から教諭は、「エルマーのぼうけんすごろく」という目標に向かうプロジェクトを、子どもに提案し

ていく。その様子は上記の報告資料の中で以下のように述べられている。

翌日、子どもたちに「みんなでエルマーのぼうけんすごろくをつくろう！」とあらためて提案してみた。すると、子どもたちの方が“先生、何を今更？”といった反応だった。

E 「もうつくってるじゃん」

I 「教室の入り口から入って進めていくやつでしょ」

K2 「積み木と同じのサイコロがいい」

K3 「いのししにあったら、3すすむ……とか」

O 「どうぶつの順番がいつもわからなくなるから、貼って！」

……この日を境に、“エルマーのぼうけんすごろくをつくる”という大きな目標を堂々と言葉にできるようになったと思う。“ディティールを細かく細かく埋めていく”

……子どもたちとここにこだわり、楽しんでいきたいと考えている。

「何を今更？」という反応だったという子どもたちは、やはり自分たちの中ではそういう大きな活動を当然のこととしてやるもの、あるいはもう既にやっているという考えがあったのかもしれない。しかし、教諭の方は恐らく、プロジェクトとしてどんどん引っ張っていくことで、子どもたちの個別の関心や願いを無視することになるのではないかという思いがあったと思われる。

これ以降、星2組はエルマーの等身大すごろくづくりに向けて、本格的に始動する。10月は運動会の練習と並行しながら、動物島を再現したパネル作りや、みかん島のみかん作り、キャスターが付けられた、乗れるイノシシの製作が行われている。イノシシ製作が始まった頃、他の動物はどうするのかといったことや、すごろくのイメージについての話し合いが行われている。その時の様子が、星2組学級通信「つーながろ No.63 (2011.10.27)」に記されている。

Aくんのいのししづくりが始まったあたりから、

M 「ねえ、他の動物はどうするの？」と何度も聞いてきました。進藤「そうだねえ、何が必要？」ある日子どもたちに聞いてみると、

「ねずみ！」「カメ！」「トラ！」「サイ！」「ライオン！」「ゴリラとサル！」「ワニ！」…



写真06 「エルマーのぼうけんすごろく」で遊ぶ

…全部です。(ホントにこれ全部作るのが〜……と黒板に書き出しながらちょっと焦る担任)「ウサギもいた方がいいかも」「ネコ」「イヌも」「キリンは?」(えっ!?!そんなのいたっけ?) 子どもはアレコレ言います。

みかん狩りにいった(木) 帰ってきて、黒板に教室の図を描き、それぞれが思う“すごろく”のイメージを出し合ってみることにしました。それぞれが思い描いていることが、こうやって出されながら、つなぎ合わさっていく瞬間ってワクワクしますね。黒板の私の絵を見ながら「先生、それワニじゃなくてカエルに見える」「おい! 舟反対向き!」……などと野次を飛ばされながら、でも「こんな感じ?」「こう?」と子どもたちのイメージを絵にして描いていくのが私の役目です。

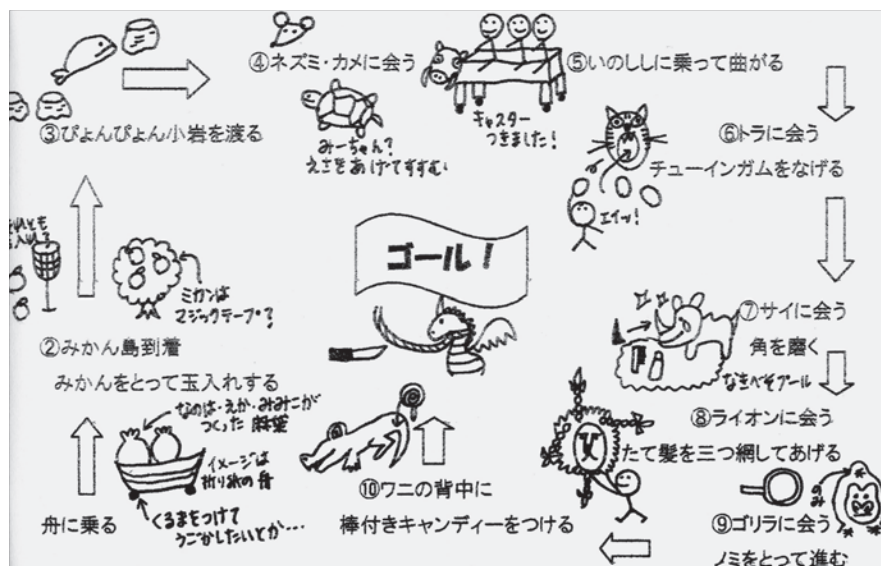
そして、教諭が描いた図を基に、どこに止まったらどんなことをするかということが話し合われた。子どもたちから様々な意見が出ている。

【ドア】①入り口スタート!

R 「①のところで、受け付けにして、必要なものをリュックに詰めてもらおうよ! チューインガムとか、ペロペロキャンディとか、虫めがねとか、ジャックナイフとか」

K 「アイテムだね!」

D 「②のところにいく舟の向きが…… みかん島につくように」



- K3「みかん島に着いたら、1回寝る。1回休みにしたら？」
 K2「ジャンケンで勝ったら進める、とか」
 O「ぴょんぴょん小岩の途中に、クジラもいる。ぴょんぴょん小岩修理しないと」
 E「④のところに、ホントのみーちゃん〔クラスで飼育している亀〕おいとけば？」
 I「⑤でAのいのししに乗ってもらえば、Iくん押してあげる。花組なら3人乗れる」
 N「サイの角、いいこと考えた！」茶色い紙をかぶせといて、歯ブラシで磨いたら、スポってとれるようにするのは？」……「それいい！」「いいねえ！」
 I「⑨Iくんがつくってきた虫めがねに、ノミくっつけるんでしょ」
 A「棒付きキャンディーは、お客さんがエルマーになって輪ゴムでしっぽにくっつけばいい」
 M2「ゴールでリュウにのりたい」

ミカンの木や動物を置き、そこに止まったらゲームのようなことをするという、すごろくのイメージも決まり、イノシシに続いて他の動物たちの製作も始まる。子どもたちは得意の木工等で動物を作っていく、ぴょんぴょん小岩やプール、様々な動物が置かれた教室の中は、益々『エルマーのぼうけん』の世界のような雰囲気になってきていた。積み木に木材を組み合わせた骨に、新聞紙や布、紙を張り付けていく張り子作業は、動物ごとにグループに分かれ、子どもと教諭の協同作業で行われる。大人の人手が足りないので、保護者にも手伝いに入ってもらいながら、3日間の張り子作業でどんどん動物たちの皮が出来上がっていった。

みんなが動物作りに励んでいる中、M3ちゃんのように、「ネコを作るのではなく、自分がネコになりたい」と言う子どもも出てくる。「受付で、キャンディーとか虫めがねとか渡す人になるの」ということだった。すごろくにどう関わりた



写真07 イノシシをつくる



写真08 張り子作業を経て

いかは子どもそれぞれだった。どの作業に集中するかということも、その日その日によって微妙に違い、時にはふざけ合って遊んだりしながら作業するという、柔軟な雰囲気の中で、しかしすぐろくの完成という目標に向かい、着実に活動は進んでいった。

すぐろく入り口で、ネコに見送られながら乗る舟をつくろうということになり、過去に和光鶴川幼稚園で実践されていた「でんしゃごっこ」の電車の構造を活かし、また、Eくんのお父さんにも手伝ってもらいながら、子どもが5、6人は乗れるような舟が完成した。

動物や舟、小道具など、すぐろくを構成するための道具が揃ってくると、プロジェクトは、実際に遊びながらつくっていくという方向へ向かっていく。星2組学級通信「つーながろ No.80 (2011.11.28)」には、次のように記されている。

動物があらかじめ出来上がり、舟もできて……すぐろくの中身を相談するうち、私の中に“まずは子どもと実際にやってみたい！”という思いが高まってきました。机上の空論(教室での話し合いでも大きな方向は子どもたちと共有できている、とは思っていましたが)から、実際あそびながらつくっていく転換期に来ていると感じたからです。

進藤「木曜日は、体育室でやってみよう！」と子どもたちに言うと「やったー!!」と大喜びの子どもたち。朝から期待いっぱいの様子でした。(後略)

広い体育館で実際に遊んでみることで、みかん島やぴょんぴょん小岩、動物のところに止まって行うゲームや、どうやってすぐろくを進めていくのかということに関して、変化が出てきた。上記の学級通信によると、当初は大きなサイコロをふって、進むようにしていたのだが、動物等のところを全部巡ると考えたら、サイコロは使わないでもいいのではないか、遊びコーナーを通過したらスタンプをもらえる、スタンプカード形式がいいのではないか等、「あそびの内容も、欲しいものも、毎回どんどん変わっていきそう」とのことだった。

すぐろくの内容は、自分たちで遊んでみることを繰り返すたび、新しいアイディアが生まれ、どんどん変化していく。その様子が星2組学級通信「つーながろ No.81 (2011.11.30)」に次のように記されている。

(火)は体育室でのすぐろく2回目。今日は欠席ゼロで全員で参加できて何よりでした。Yちゃんは朝教室に来るなり「ああ～！ 今日できるんだあ～!!楽しい!!」とうっきうき♪ Hくんには周りの子たちが「楽しいよ～!」「みかんは4個カゴに入れて、それで麻袋に入ってぴょんぴょん一周するの、それで……」と説明していました。

体育室は人形劇サークルの背景画をお借りして、ジャングルの雰囲気に。

またエルマーが6日間舟に乗って旅をする道もパネルで仕切りました。

Dくんがボリスの設計図の話し合いのときに、「空を飛べるように扇風機でいっぱい風を起こしたい」と話していました。結局ボリスチームの子どもたちの設計で“乗れること”を重視した設計になりましたが、Dくんの“扇風機で風を起こす”アイデアがどこかで活かさないか……と私の中に温めていました。そこで、6日間の船旅の途中に嵐の日をつくることにしました。扇風機にスズランテープをつけると、舟にのったエルマーの顔に当たる仕掛けです。Dくん「そう！こういうこと!!!」と、大満足の様子で私もとてもうれしく思いました。

さらに、Mくんの「鳥が飛んでるようにしたい」ということで、小鳥の人形も用意しました。今日はIくんとMくんが小鳥を操りましたが、二人ともとっても優しい表情で、舟にのったエルマーたちの頭をチュンチュン♪とやっていました。

Eくんの蜘蛛の巣のアイデアは途中でゴム紐を絡ませて、そこをすり抜けるということにしました。

ライオンのところでは、I「なわとび10回とべたらいいよ!」ということで、リュックをしょったままみんな大真面目に(かわいかったです!)10回縄跳びを跳んで次のゴリラへ。前回のジャンケンより面白みが出てきたように思います。

……途中ケンカが起きたり、物が壊れたり、ゴチャゴチャはしていますが、みんなが楽しかったようです。終わってから感想を聞いてみました。

S「まえよりもずっとおもしろくなった!」

Y「やれてよかったー!すごかったのしかった」

M「次は、しりとりが10回続いたらいいってことにするのは?」

K「ボーリングを入れたい」

Y「的当てもいい」

S「合宿でやった、スポンジをお箸で移すのはどう?」……次回がまた楽しみです!

学級通信の記述から、体育室で実際に遊んでみるようになり、子どもたちがとても乗り気で、自分たちで楽しみながら色々なアイデアを出していることが窺える。これまで地道に製作活動や話し合いを続けてきたのが、ここにきて、星2組全員のプロジェクトとして一気に現実味を帯びたということではないだろうか。進藤教諭は上記の学級通信で「その日に子どもたちと、次にアイデアが生まれ、どうすれば実現するかを考え、そしてやってみて、失敗すればまたあらたに考え出し……を繰り返すことを、子どもたち自身が楽しんでいる」と思うと述べている。その後も、空き缶を積んで文字をつくるゲームや、ボーリング等、楽しい遊

びが次々と開発されていく。

実際に遊んでみて、イメージが深まったところで、すごろくへの命名が行われる。星2組学級通信「つーながろ No.83 (2011.12.2)」には次のようにある。

これまで星2組のプロジェクト活動を、子どもたちと「エルマーすごろく」「人間すごろく」「エルマーのぼうけん」「エルマー」など、様々な名前と呼んできました。そもそも、始まりはK2くんが「教室がすごろくになったらいいのに」という一言からでした。

ところが、そこから動物が作られ、それぞれの動物の場所でのあそびが盛り上がってきて、○コマ進む、○コマ戻る……ということはあまり重要ではなくなり、次のあそびコーナーに進める、ということに子どもたちの気持ちの重点が置かれているように思います。

(火) にはさいころは一度も登場しませんでした。そこで、私から切り出してみました。

進藤「エルマーすごろくの名前のことだけど…… 今日サイコロは使わなかったね～。すごろくっていうと、やっぱりサイコロで進んだり戻ったり、やっている人が順番にサイコロ回すってことだと思うけど……」

K 「じゃあ動物もいっぱいいるし“エルマー動物園” っていうのは？」

K2 「動物園じゃないでしょー、動物園にりゅういなしさ」

M 「“サイコロランド” がいい。サイコロ使いたい」

K2 「K2も！」

N2 「エルマーランドは？」

E 「それ前に先生言ってなかった？」

進藤「えっ？ 言ってた？」(記憶にないのですが、言っていたらしいのです)

N2 「でも今のはN2が考えたんだよ」

E 「ランドって何だ？」

M3 「ディズニーランドとかのランドだよ、楽しいところってこと」

K 「じゃあジャングルランドは？」

O 「ジャングルばっかじゃないし」

……とりあえず黒板に残したまま保留、ののち(木)の帰りの会で“エルマーランド”に決定しました。これからは“エルマーランド”と呼ぶことにします。

エルマーランドという名前も付けられ、これまで星2組の子どもたちが自分で楽しんでたのが、お客さんを招待して楽しんでもらうという活動に転化してい

く。12月に入ってから、年少、年中組や星1組の子どもたち、「伝える会」にて保護者、鶴川小学校5年生の児童を招待して、遊んでもらうという機会が数回あった。星2組の子どもたちは受付や、動物の場所に立ってゲームの説明をする等、楽しんでもらう側に立った。「これ、すごいでしょ。おもしろいでしょ」と言わんばかりに、お客さんに楽しんでもらおうと張り切る姿が見られた。

2学期も終わりに近づき、自分たちで楽しみ、お客さんに楽しんでもらい、エルマーランドのプロジェクトは一区切りつきそうな時期

に来ていた。しかし、教諭が考えていた以上に、エルマーランドに対する子どもたちの愛着は大きかった。そして、エルマーランドの動物たちを今後どうするかということで、真剣な話し合いが行われることになった。その様子は、星2組学級通信「つーながろ No.98 (2011.12.20)」に細かに記録されている。これによると教諭は「これだけやってきたのだからきっと終われる。次へ向かっていいだろう」「子どもは大抵捨てることを嫌がるが、終わりをつけて次へ向かわせるのも大人の役目だろう」という思いでいた。教諭としては、エルマーランドのプロジェクトでやってきた過程が子どもたちにとって大切であって、それが子どもたちの中に残るなら、形として動物たちを残しておくことは重要でないと考えていたということである。しかし、保護者からも、子どもが動物たちに愛着を持っていて、壊してしまうと悲しむのではないかという意見が出てくる。それを受け教諭は、子どもたちと話し合いの時間を持つ。教諭によると40分近い話し合いの中で、様々な葛藤があり、涙を流す子どももいたということである。話し合いを経て、動物の写真を撮って、絵本あるいは写真集のような形で残しておくということ、今はとりあえず動物たちを捨てずに、とっておくということが決定している。前述の学級通信には以下のようにある。

(金)の話し合いを経て、私もこの土日ずっと考えていました。教師には3学期の見通しがあります。劇が始まれば、教室中が大道具小道具でいっぱいになります。おままごとが好きな星2組はきっとその道具であそぶだろうしなあ……劇の会があり、その間にもタッチラグビーや版画や土手滑り……



写真09 入り口でお客さんに道具を渡す



写真10 エルマーランドで遊んでもらう

子どもは新しい楽しみを見つけていくだろうなあ……エルマーランドの動物たちはやがて子どもたちの記憶の片隅に、思いでになっていくんだろうなあ……と。

でも子どもたちの“今”はやはり捨てたくない、とっておきたい気持ちなのです。大人とは違って当たり前だ、と。3学期になれば、もうあそびないかもしれない。教室の片隅で埃をかぶり、だんだんと壊れていくかもしれない。でも、それでもいいかな……と私の思いも動き始めました。“君たちが取っておくとやったんだから責任を取りなさい”とは全く思っていないし、子どもの気持ちは変わっていったら当然です。

それでもいい！ と私も考えを変えました。

(月) 子どもたちに「みんながどれだけこの動物たちを大事に思っているか、それがわかって、先生も考えを変えたよ。“どうでもいいや”って思ってる人は誰もいないんだよね」と話しました。子どもたちの喜んだこと!!でも、それでいて「写真集も作るよね!!」と意気込んでいます。

教諭は子どもたちの思いに触れ、「考えを変え」て、とりあえずは動物を残しておくということを決める。6月から継続的に取り組んでいたエルマーへの子どもたちの愛着は想像よりも大きく、プロジェクトは終始、子どもたちの思いと教諭の願いの中で揺れながら展開した。

4——総括

以上見てきた和光鶴川幼稚園星組における2011年度のプロジェクト活動において共通しているのは、子どもたちの好きなことや関心のあることを入口として、舞台や『エルマーのぼうけん』といったテーマのもと、クラス全体で一つの大きな目標に向かって協力し、実現しているということにある。どちらのクラスのプロジェクト活動においても、演じることであったり、裏方であったり、製作することであったり、遊びを考えることであったり、個々の子どもたちの関心は多種多様であった。それらの関心事と、教諭が一つのプロジェクト活動に向けての、大きな見通しや予想に基づいた子どもたちへの働きかけが融け合う形で、クラス全員でのプロジェクト活動が実現している。どちらのクラスにおいても時には30分近くに及びプロジェクト活動に関する話し合いの中、子どもたちは次々と自分のアイディアを出しながら、舞台づくりや等身大のすごろくといった目標をどう実現させるか、真剣な様子で話し合っていた。

またこれらのプロジェクト活動は、「楽しさ」や「面白さ」が軸となった探究活動であったといえる。筆者は幼稚園の教諭から幾度か、星組のプロジェクトを「夢をかなえる体験」と表現しているのを聞いた。両プロジェクト活動はまさに、

「自分たちの舞台」や「等身大のすごろく」といった「夢」を実現させる探究であったといえるのではないだろうか。そして、和光鶴川幼稚園にはその「夢」を実現させるための、教諭の働きかけ、保護者の協力、何かつくりたいと思ったらすぐに取り掛かれる木工の材料や道具や技術といった、文化や環境が備わっている。こうした環境・文化と「星組はプロジェクトをやる」という認識が、子どもにも教諭にも共有されているということが、プロジェクト活動を推進する土壌にあったと言えるだろう。

先述した、小松福三氏による「電車ごっこ」の実践も、「乗れる電車」を作りたいという子どもの願いから、その目標に向かい試行錯誤を行うというのが発端であった。しかし浅井（2012）の指摘にもあるように、「電車ごっこ」の実践がカリキュラムとして定着することによる、実践の「マンネリ化」が起こった。今回検討した両プロジェクトも、和光鶴川幼稚園が定着したカリキュラムを乗り越えようとする挑戦の渦中で実践されたものと言える。従って教諭には、定められたカリキュラムをなぞるのではなく、その都度子どもと一緒にカリキュラムをつくっていくことが求められていた。それは時に、子どもの願いを聴きとり、汲みあげることと、教諭がプロジェクト活動に向かい、積極的に子どもたちを導いていくことの間に葛藤を生じさせるものでもあった。9月29日の園内会議では、その辺りの葛藤が議論の焦点となることもあった。今回の場合は、教諭が提案すると子どもたちはどんどん乗ってきた。また話し合いの中で、子どもたち一人一人の意見やアイディアが丁寧にくみ取られており、時には子どもたちの熱のこもった希望によって、教諭が考えていた方向性が覆されるということも起こっている。恐らくほぼ全ての子どもが、決してやらされたものでなく、自分たちでつくりあげた物として、プロジェクト活動の記憶を胸に刻むことになったのではないだろうか。しかし、例えば教諭をはじめプロジェクト活動に関わるスタッフの人数や、プロジェクト活動の規模や期間、全員で行うのか、少人数のグループで行うのかといった条件の問題とも関連してくることであるが、子どもの声をどのように聴くのか、教師の指導性をどのように発揮するのかということは、検討の余地が残されていると思われる。

今後の課題として、今回取り上げたプロジェクト活動と、他のプロジェクト活動を比較検討するということが挙げられる。例としてプロジェクトによるテーマの選択と、それに伴う子どもの言葉の聴きとりという視点での検討が考えられる。今回検討した両プロジェクトは、上記のように「楽しさ」や「面白さ」の探求として位置づけられ得るものであるが、例えばそれが科学の芽につながるような「不思議さ」の探求である場合は、また、物語やファンタジーの世界に入り込むという活動の場合はどうなるのか。声にならないものも含めて、保育者が子どもの言葉をどのように聴きとり、それをどのようにプロジェクトとして具体化していくのか。それらの要素によってプロジェクトの質が左右されると考えられる。

今後の課題としたい。

最後になったが、今回、プロジェクトの記録に入ることを快く許可して下さった和光鶴川幼稚園の園田園長、保志副園長、星組担任の室橋先生、進藤先生、その他職員全ての方々、子どもたち、保護者の方々に、感謝の意を表したい。

〔はまだ しんいち〕